

時の過ぎ行くままに

桐野 三郎



※生産とは――

新宿で飲んだくれていた時代がある。大学時代の四年間だ。大学には行かない日が多くつたが新宿に出かけない日はほとんどなかつた。

飲んでいて終電車に乗り遅れると行きつけの飲み屋の一階にもぐりこませてもらうこともあつたが、夏の暑い夜などは新宿伊勢丹のショーウィンドウの出っ張った部分に寝たりもした。大理石（？）の冷たさが快いのだ。だからあの頃の新宿のことはいわゆる朝、昼、晩だけでなく、夜がほのぼのと明けはじめる

なんて時間帯の裏街の表情まで知っていた。そんな新宿の夜明けの風景を書いた森村誠一の小説を読んだことがある。小説の題や筋は覚えてないが、主人公がまだ明けやらぬ新宿東口でゴミの山を見つめながら、「生産とはつまりゴミを造ることだつたんだ」と悟る場面が妙にリアルだった。

ナルホド。ぼくらの身辺にあるテレビや冷蔵庫や洗濯機などはもちろん、机や椅子やベッドに、衣類や本棚なんでもものもいづれはゴミになる。いや、そればかりか、写真アルバムとか日記などの記録や、先祖伝来の書画骨董なんでものまで時間の差こそあれ究極、いざれゴミになる運命は免れない。

ということは、日々生産されるもののすべてが、それが活用される期間を飛び越して考えればつまりゴミだというわけである。
ぼくはモノに対する執着心があまりない。

ことに何かを蒐集するなんて趣味とは無縁だ。

そんな趣味のある人をバカにするつもりはないが「所詮はゴミにしかならないものを」、という気持ちがどこかになくもない。これも新宿の夜明けのゴミの山が記憶の底にあるせい。

新宿でぼくが飲んだくれていたころからおよそ六十年が過ぎて、いま二〇一一年夏。3・11シヨツクから四ヶ月が経過したのに

被災地の瓦礫の山はまだいくつも残っている。「モノは究極はゴミになる」どころか、被災地の人たちの所有するものは、家や車までひっくるめて全てが一瞬にしてガレキの山（つまりゴミ）と化したわけだ。

ガレキの山また山。あの荒涼たる映像をテレビや報道写真でぼくはもう何十回みせられたことだろう。

※ 文明とは――
それにしてもガ・レ・キという仮名文字三つを組み合わせたこの音の響き、何処かおぞましく不吉なものを感ずるのはぼくだけだろうか。

坊主憎けりや袈裟までーの例かもしれないがこの語感は、網膜に焼き付いてはなれないあの光景とぴたりかきなるようになつてしまつた。

3・11は東日本中心であれだけだつたのだから、もし東京中心だつたらなどと考えるとゾツとする。高層ビルの揺れは3・11ですら想定外の複雑さと大きさだつたらしいから。被害も当然想定外の大きさになることは必至。ということはガレキの山も想像を絶するものになつたはず。

同じような地震がニューヨークだつたらとかドバイだつたらなどと考えているときりが

ないが、最後にぼくらが悟るのは、森村誠一
流でいえば「文明とはつまりガレキの山を築
くことだったんだ」ということになりそうだ。

それにしても千年に一度の災害を「想定外」
とはよく言うぜ。一万年に一度の周期だつて
百万年の間には百回やつてくるのだ。そして
その一回は明日かもしれないーというのに。

※ 人類は頭脳の使いかたひとつでー

恐竜は巨体に恵まれたがゆえに食物連鎖の
頂点に立つて一億数千万年の繁栄を謳歌した。
しかしその巨体ゆえに、やがて環境の変化に
対応できずに絶滅していった。

足元を見回してみれば最低所得層のわが家
ですらいつの間にやらオール電化。「デンキ」
がなかつたら一日たりともにつちもさつちも
いかない現実に改めて気づく。いつたん天変
地異でも起こつた日には、周囲の生き物の中
でサバイバルゲームに最も弱いのがぼくたち
人間であることは間違いない。

臨出来たわけだが、やがてはその頭脳が発達
し過ぎたがために滅亡への道をたどることに
なるということだろう。

—人類滅亡の日を想像してみる—

あとに地球上に残るのはガレキの山また山、という荒寥たる風景だろう。人類が二足歩行を始めてからおよそ六百万年。その間人々と築いてきた文明とやらの総量は所詮巨大なガレキの山でしかなかつたーということか。

※ 文明の軌道修正は—

人類が衰亡への道をたどりはじめていふとすればその理由は、持てる知能を「豊かさと利便性の追求」だけのために濫用し過ぎて、いわば、麻薬中毒のような症状に陥っているからだ。

ならば軌道修正のためには、この症状の治療に成功すればいいだけのこと一なのだが。その中毒症状がこうも重篤であつたのに驚かされているのが現状であることもまた事実。

政官財界をはじめ、学者やマスコミを含めたいわゆる日本の文化人たちまでが原子力ムラに群がり、電力会社のお先棒をかついで、世論を捩じ曲げてまで利権にありつこうとしているていたらしく。中毒症状回復の道は険しく遠いのかもしれない。

地球の周囲はおよそ四万キロ。考えようによつてはとても小さなホシ（惑星）である。しかもぼくらは、いや、ぼくらだけでなくこのホシに生きとし生けるものの全ては、それを取り巻く薄い皮膜のような大気と水なしには生きてゆけないのだ。それを汚してしまつては、人類に未来がないことだけは確かだろう。

我が国には古来から「知足」という、たつた二字でその全容を知り得るすばらしい哲学があつた。いま、文明の在り方を問いつすには欠かすことのできないキーワードではな

いだらうか。

地球というホシは人類だけの住み処ではない。

※ 未知との遭遇 —

七月一日、地元南日本新聞の「海外こぼれ話」に〈科学的予測?〉という小さな記事が出ていた。わざわざクエスチョンマークをついた意味は、「ほんとかよ?」と言いたかったのだろう。内容は次のとおり。

ロシア科学アカデミーチームが、人類は二十年以内に宇宙人と対面するとの予想を発表した。そしてその宇宙人は人間によく似た格好をしている可能性が高く、二本ずつの手脚を持ち、頭は一つと想定されるという。

研究チームは宇宙に信号を発するなどして冷戦時代から地球外生命体を探し続けてきたが「原子の生成と一緒に、生命の発生は必然

なのだ」と自信満々らしい。発信元は〈モスクワ、ロイター=共同〉となつていて。実はこの記事、八月二十五日発刊予定の「隨筆かごしま一八七号」にも〈見上げてごらん夜の星を〉という題でぼくはネタにしている。人類の未来を考える上では恰好の話題だからだ。

でもそれを、再度この稿で取り上げる理由はほかでもない。「炉ばたセイ談」仲間の畏友入来院重朝氏が同誌6号に書いていた「二十年後の世界」と関連づけて考えたいからである。

彼は「これから二十生きるつもりですから予想します」とはつきり断つた上で世界情勢を予測し、「二十年後のその状況をこの目で見届けてサイナラしたい」と書いている。

もちろんその予測の中に宇宙人との対面は出てこないが、この情報でさうに想像は膨ら

んで恰好の酒の肴になるのではないだろうか。

次の炉辺での焼酎が楽しみだ。

ところで、このぼくが宇宙人と対面のニュースをどう把らえているかーだが、もしそれに興味のある読者がいらしたら「随かご」を読んでいただけたら有難い。

ぼくの人生にとつてエポック・メーキングな出来ことといえば、日本の敗戦に次いでこの春の東日本大震災だったのだが、もし宇宙人と遭遇の日を見ることができたらそれをはるかに上回る大事件である。

ぼくもその日が訪れるまでは死んでも死にきれないと思ふようになった。

そんな気の遠くなるような時間のながれの中で二十一世紀がはじまつたばかりのいま、鹿児島は山北の入来の炉辺に集う縁の不思議をいまさらのようにおもう。この抱きしめたくなるような縁を結んでくれたのが入来院貞子さんだつた。

その経緯も「山北の便り消えても」というタイトルで「随かご一八六号」に書かせていただいたから重複は避けるが、貞子さんには感謝の気持ちは当然ながら、あのはにかんだような優しい笑顔に甘えてばかりいて申しわけなかつたと、いまつくづくおもつてゐる。ぼくはあの笑顔を忘れない。

人類が滅亡の危機を二度や三度乗り越えたからといって、もちろん永遠に続く種の存在なんてあり得るわけがない。数千年か数万年、いやあるいは数億年かは知らず、人類滅亡の日はいつか必ず訪れるわけだ。

※ 出逢いとは —

生ある者は死し形あるものは滅す。同じようすに始まりがあるものには終わりがあるのは自明の理。

※ 時の過ぎ行くままに —

「炉ばたセイ談」もこの7号からは、貞子さんに代つて、昨年から仲間に加わっていた中西喜彦氏が編集を担当してくださることになった。うれしい限りだ。

同氏が「セイ談6号」に寄せて下さった〈能樂で紡ぐ人生の指針〉という一文からはまた、教えられることが多さに驚いたものだつた。これもまた、これから炉辺での焼酎が楽しみである。

ぼくもこれを機に、「時の過ぎ行くままに」というちよっぴり気障なタイトルで折々の心象風景などを描（書？）かせていただこうと思つてゐる。

すでにお気づきの読者もおいでと思うが「時の過ぎ行くままに（アズ・タイム・ゴーザ・バイ）」とは、イングリット・バークマンとハムフリー・ボガード主演の往年の名画「カ

サブランカ」の一場面、リックの店で黒人サムが弾いていたあの曲の名だ。

出会いがあればいつか必ず別れの時が訪れる。そんな切なさを想うときに思い出す曲であり、言葉である。

